

〔資料〕

## 貞心尼自筆 龍海院藏雲和尚宛書簡(複製卷子)

翻刻・解題

細井 瞳・田熊 信之

### 【解題】

良寛禅師の最晩年の行履に光を添えた遺弟貞心尼は、師の遷化後、その風光の埋もれるのを惜しみ、師との間にこまやかに交わされた和歌を綴った『者知須の露』を残している。また、師の道徳を伝える詩偈の数々を世に遺そうとする中、師の遺芳に接してこの詩集の採録、開版を志していた禅傑謙巖藏雲和尚に遭い、持てるもの全てを捧げてその上梓への助力を行なっている。こうした中に重ねられた藏雲和尚との間の書簡の一部が、現在、禅師、貞心尼、及び藏雲和尚のゆかりの越後の地に伝蔵されている。

藏雲和尚宛の貞心尼自筆の書簡がなぜ藏雲和尚の遷化の地、上州前橋の住持院に残されず、越後の各地に散じて所蔵されているのかを筆者は不審に思い過ごしていたが、これは、藏雲和尚晩年の弟子の洞水覺山和尚が師の遷化後、その遺品を自らが引き継ぎ、師寮寺から晋住した越後柏崎の全性寺へ持ち移したからであり、さらに覺山和尚が同地の普廣寺に転じてそこで火災に遭い、その遺品の多くが失われ、前住地に残ったものなども、漸次散じて諸家に蔵されるに至ったからであった。このことに関しては、こよなく貞心尼を愛しみその遺文の収集を進められた堀桃坡氏が、縁故者から聴取し確認したさまざまなものを自著『良寛と貞心尼の遺稿』に記している。さて、貞心尼自筆の前橋龍海院藏雲和尚宛書簡は、早くは明治大正の間に在地柏崎の実業家中村藤八氏が筆録させた「浄業餘事」の録文、大正三年に西郡久吾氏によって『北越傳人沙門良寛全傳』中に収録された四通の遺文、また昭和三、四年に在地の禅僧で研究家の上杉艸庵氏が言及したものの、次いで昭和十三年に相馬御風氏によりその著『良寛と貞心尼全集』

中に採録された二通、さらには昭和三十七年に先記の堀氏によって載録された六通の遺簡の存在が確認される。

こうした中の貞心尼自筆書簡の数通は、良寛禅師の書蹟研究やその蒐集で高名であった安田鞞彦画伯や地藏堂の医師で良寛禅師の崇敬者藤井正宣氏なども収蔵されたことがあったようで、その一部が精巧な複製卷子として世に残されている。本誌で紹介する貞心尼自筆藏雲和尚宛書簡は、この中の一本で、幸いなことに、地藏堂町(現燕市)の良寛史料館に蔵されているものである。この複製卷子の製作の経緯や原本の所蔵については現在その詳細が知られないが、巻末の台紙余白下部に大和古印風の字体で捺された陽字印「坤吉」が見られることから、安田鞞彦画伯が直接的にか間接的にかこれに関わっていたことが明らかである。

ところで、貞心尼自筆の藏雲和尚宛の書簡は、現在までに原蹟のまま正確に紹介されたものがなく、すべて活字採録のもののみが一般に知られるばかりであり、その録文には草書の判読の過誤や表記の問題が出来し勝ちであるため、ここに複製本からではあるが、その原蹟の写真を掲げて原蹟に准じた録文とこれを翻字した釈文を提示する次第である。

さて、複製卷子には、その時々々に書き送った貞心尼自筆の書簡四通が個々に精密に復印され、紙継ぎや配列を含めて、原品通りに貼り継がれていると見られる。卷子は、緑青地金欄手の布表紙を返すと、袖様の茶褐の布の見返しのもとに、広狭、長短ある書簡が順次現れる。卷子の天地幅は25cm余、書簡貼り込み面の上下幅は21cm余、左に展げ切った長さは3.5m余にも及ぶ。並べられた書簡には、天地幅17.5cmの巻紙を用いたと見られる第二書簡を除いて、概ね13〜4cmの間隔で19か所ほどの紙継ぎ跡が見られ、貞心

尼が半紙を適宜貼り繋ぎ筆を走らせていた様が想像される。

貞心尼は、やや肉太の万葉仮名を含めた草体の文字を綴っているが、その書態は、良寛禪師由来のものとも見えるところがある。良寛禪師も習った仮名の手本、当時流布していた木版刷りの「散々難美帖」や「秋萩帖」の影響を受けたもののように、独特の趣をもっている。良寛禪師の初期の仮名に似た姿が認められる。詳しくは、写真図版を一覧して頂きたい。

翻刻の後に、卷子装とされている藏雲和尚宛貞心尼自筆書簡を便宜的に配列順に番号を付し、先学の所録の藏雲和尚宛貞心尼自筆書簡を対照させた表（細井作成）を付載するが、それらの書簡は、その何れもが、良寛禪師の詩集の出版に関わる内容を綴っており、第一書簡に記される「先年」の文字が何れの年を指すのか不詳であるが、第二書簡は、その中の（4）の部分に貞心尼の庵居釈迦堂が不在中に大火で焼失したことを記した文が見られることで、この書簡が、嘉永四年（一八五二）四月廿一日の大火の三日後に書かれたものと確認され、また、第三書簡の末尾添書の和歌について、堀氏が、元治二年の紀年がある類歌の存在から、この書簡もこの年に書かれたものかと推測されている。

なお、堀氏が採録する「その二」（やよひ廿七日付）の書簡は、その文中に「去年中は殿様御かくれ遊ばされ」と綴られていることから、姫路藩主酒井家第七代当主忠顯公の死去の万延元年（一八六〇）〔十月十四日〕の翌年、万延二年が二月十九日に改元されて文久元年（一八六一）となった一月程後に書き送られたものと確認される。

これらを総覧すると、卷子中のものを含めて、貞心尼の藏雲和尚宛の現存の書簡は、藏雲和尚が奔走して良寛禪師の詩集の出版を実現させる直前の折のものと見ることが出来るようである。何れにしても、卷子に第一、第二、第三、第四と貼り並べられた書簡には、藏雲和尚の安否を問い、自らのさまを述べ、和尚の依頼に応えて、師の遺墨（五十音の書き物ほか）や抄写詩集（遍澄抄写のもの）、某氏執筆の序文を伝え、肖像画などを呈し、また師の話しの聞き覚えや係累の報告などをする貞心尼の誠実な行状が顕われている。

ところで、貞心尼は、自筆書簡で、師良寛禪師の詩集開板や碑刻立石の

企図やその動静などを藏雲和尚に書き綴る中で、余人が執筆しようとし、また執筆して貰った「序文」について、「何れにても無き方が中々にましならむかと存じ参らせ候」と記し、「序文の事仰せの如く俗人ましては其人を師を知らぬ者の書たるは中々に徳を損じ無きには劣る事も御座候」と書いている。この条りは、良寛禪師研究家に殊に詳知されるところである

が、この口吻については、研究家の諸氏ははじめ禅仏教の専家にまで、挙げて、女性のもつ頑迷さ、尼僧特有の偏狭さのあらわれ、等々と批評、非難をされている。しかし、これらは、本質を見失った僻見の表れとしか筆者には見えない。貞心尼は、本書簡の補添に「其の人を（知ら）ずして」と記しているように、当人の本質を知らぬ人が、文筆の技の巧みさや声誉の大きさのもとに仰々しく序文を書くのは、もってのほか、と言っている。

さらに、在地粟生津の漢学者鈴木氏（文臺先生）の場合は周囲のものが肯んじなかったとのこと、江戸の漢学者亀田綾瀬先生の場合はその父鵬齋先生との交流はあるものの「その人をしらぬものが「その人を」書いた序文を戴くのは「なきにもおとる」というわけで、貞心尼は、愛語増長の一筋の一生を貫いた良寛禪師の息吹に接していた同じ仏道を歩むものとして、それらを苦評したまでのことなのである。貞心尼が行学を兼ね備えた禅傑藏雲和尚に最大の信を寄せたのも故あることと思われる。現在、藏雲和尚の貞心尼へ宛てた書簡が目撃できないので、藏雲和尚の言句は分明でないが、「序文の事仰せの如く」と貞心尼が記している通り、藏雲和尚もまた貞心尼と同じ思いを持っていたことは確かである。なお、貞心尼は良寛（禪師）の漢詩が読めず、そのことに気付いていてその詩集を藏雲和尚に托した、としている研究者もいるが、これは甚だしい憶断であろう。

ここで埋もれた幕末の傑僧藏雲和尚の閨歴の一部を記しておくこととしたい。その経歴は不明なところがあるが、生まれは信州下高井郡穂高村で同地の川口氏の出、早く出家して諸寺で修行、故地よりはやや近い隣国越後高田北方の薬師院で鳳山道春和尚の法を嗣ぎ、また各地へ遍歴、弘化元年（一八四四）には京都の大慈山で旃摩奕堂、覺仙坦山と共に山居辦道、風外本高禪師にも学び、また弘化四年（一八四七）月坡道印禪師ゆかりの山科の大宅寺に住持、しかしこの寺を同参の師兄とも言える奕堂和尚に譲

り、自らはその隨身となり諸事を行なったという僧である。この後、奕堂和尚が声譽を聞いた播州酒井侯の招きで前橋大珠山是字寺龍海院に第二十八世として嘉永二年（一八四九）三月に晋住した頃、奕堂和尚の推挙があったものか、酒井侯ゆかりの姫路城内の即是堂（晴光寺）に入り、その後、安政四年（一八五七）奕堂和尚が加賀天徳院に転住するに及んでその後を承け後任として龍海院第二十九世となっている。

洛北大悲山で同参した覺仙坦山は、この頃、洛北の心性寺に住持し（安政三年（一八五〇）、のち江戸に戻って著述、講釈なども行ない、その英明ぶりを發揮してゆくが、藏雲和尚は、自らが崇敬する良寛和尚の詩書を示し、坦山和尚に語り継ぐことが屢々であったようで、昌平齋出で出家した文藻豊かな坦山和尚はのちに藏雲和尚のために良寛禪師の詩の評文やその伝を含めた詩集の序文の素となるものを認めている。こうした法脈の絡み合う中で、慶應三年（一八六七）九月に、『良寛道人遺稿』が江戸芝尚古堂から上梓されるわけである。なお、柳田聖山氏は、その訳著『良寛道人遺稿』（中公クラシックス110）の解説で、その刊行を藏雲和尚の死去後と推断しているが、越後地藏堂熊ノ森の蘭法医竹山亨の遺文『竹山日記』の記事、良寛禪師の晩年の隨身者遍澄法師がこの刊本を知友の竹山亨や鈴木文臺先生に届けている記述によってこれが誤断であることが確認される。貞心尼の藏雲和尚宛の書簡は、その文面から、良寛禪師の詩集の刊行前夜のものであることが明白である。

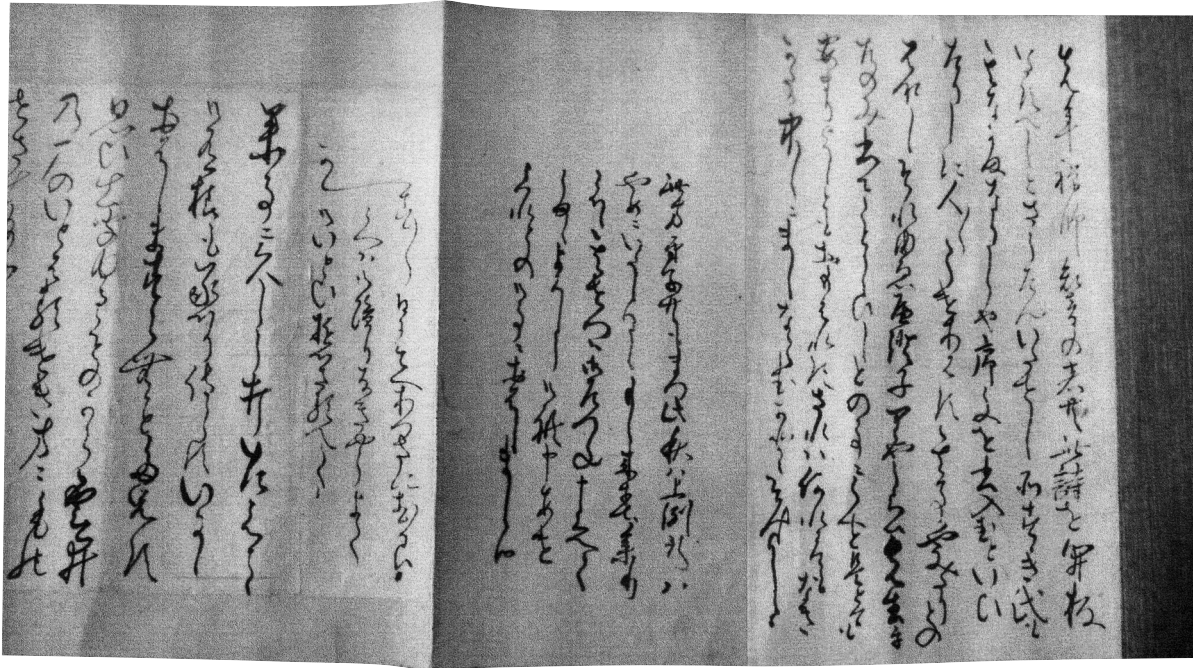
さて、藏雲和尚は、宿願の良寛禪師の詩集の上梓を果たしたのち、龍海院第二十九世を離れ、明治二年六月十二日に世壽五十七で示寂するが、龍海院住持を離れるにあたって、この大寺の任を同郷出自の高徳大岡棟仙和尚に遺囑しており、棟仙和尚はこの遺囑に従って信州大林寺より転じて龍海院第三十世となり、後に信州の興隆寺、小田原の最乗寺、能登の総持寺の住持となっている。こうした流れは、人物と行力、徳望を透視するもとに禅の命脈が滴々と逡伝され、先人の遺芳が着実に継承、発揚されてゆくことを証すようである。

藏雲和尚の経歴の詳細については別稿を準備しているが、相馬御風氏がその著『良寛百考』に採録する牧江忠右衛門（靖齋）（良寛禪師の庇護者で

深い親交をもった阿部定珍の第九子）宛藏雲和尚書簡四通中の四月十六日付の第二通に「去月中信濃地より古今希なる大地震にて……」とあることにより、これが弘化四年（一八四七）三月二十四日発生の大地震の翌月に認められた書信であることが判明するため、この頃より以前から、良寛禪師の詩偈、和歌、遺文に注目していた藏雲和尚のさまが少しく窺われることである。藏雲和尚が良寛禪師の遺文、遺詠に触れたのは、さらに以前の故里を離れて越後の高田、柏崎などで修行、滞住していた頃からとも想像される。藏雲和尚は、当時どこの地で住持していたのかは不明であるが、旧住持地の山科の靈隠山大宅寺の再興を企り、故里からは間近な越後高田の師院乗國寺、北方の薬師院に巡錫、安居、江湖會等を行なうなど、京阪、越後に及ぶ地で活動を続け、後に播州即是堂に跡を留め、さらに上州龍海院へと晋住し、示寂までの時を過ごしたようである。なお、道号を謙巖、法諱を藏雲とした藏雲和尚は、別号、雅号を珠山老人、寒華子、秋叢庵といい、書や画をも頗る善くしている。（田熊 信之）

#### 凡 例

- 一 所掲写真には新潟県燕市良寛史料館所蔵の卷子装「貞心尼筆前橋龍海院藏雲和尚宛書簡」（複製）である。
- 二 所掲写真は紙面の都合で一連のものを適宜分割して掲出したが、その各々は左右の連接がわかるように前後部、後接部の尾、首を重複させた。
- 三 卷子に貼り継がれた書簡は順次番号等を付して区分しこれを録文の上部に添記して写真と録文の文字の対読の便をはかった。
- 四 採録の文字は、上段に原字に従った録文、下段にこれを翻字した釈文として掲示し、文字遣いと内容がより明らかとなるようにした。なお、先学の採録との相違については、書簡原写真を掲出したため表記しなかった。
- 五 録文、釈文は、平成二十二年六月八月の間に、秋元奈津美、澤田薫、土居瑛里奈、細井瞳、政本真希、田熊信之の六名によって作成した粗稿を、近時、改めて細井が独力で大幅修訂し、併せて先学採録の諸書簡との比較を行ない、成稿としたものである。なお、この成稿を田熊が監閲した。本卷子中に未見の書簡については、細井が後文中で参考のため引録した。本稿の諸種の不備については高雅の諸賢のご批正をお願いしたい。



(一) 貞心尼筆 藏雲和尚宛書簡 卷子  
録文(准原字)

1

先年 禪師 知音の者共 此詩を開板  
い刀須へしとさうたんい刀世し所 春、き氏も  
其な可満なりしや 序文を書入むといひ  
たりしに人々承け合はず 其事 止みたりとの  
者那し 其れ由惠遍澄子里やうらい先生平  
たのみ書でもらひしとの事に候へど是とて  
安まり与しともおも者れ須されハ何れニてもなき  
可刀可中くニましならむ可登そんじ被參候

(2)

此方弟子共もまつ此秋ハ上州行ハ  
やめニい刀し被參候 もし來春參利  
候ハ、其世つハ御たつ年申上へく  
候満、よろしく御禮申あ遣  
久れとの御事ニお者しまし候

2

(3)

可へ春く日尔そへあつさにむ可ひ  
候へハ御障りなきやうよくく  
御いとひ遊ハさ類へく候

(4)

萬事ニ久しう折絶えて  
御有様も承はり侍ら須い可く  
お者しま春ら無と多え須  
思ひ出聞由るものから雲井  
乃厂的いと者類遣き方ニ毛能

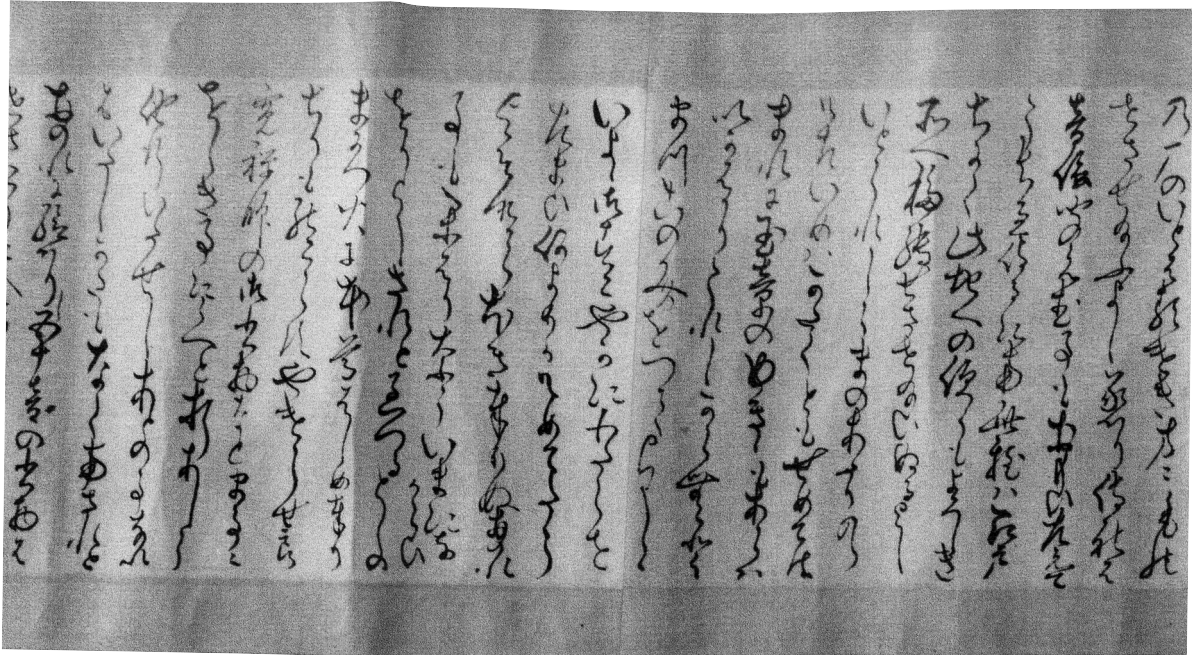
(二) 貞心尼筆 藏雲和尚宛書簡 卷子  
釈文(原字を翻字)

先年 禪師 知音の者共 此詩を開板  
致すべしと相談致せし所 鈴木氏も  
其仲間なりしや 序文を書入むと言ひ  
たりしに人々承け合はず 其事 止みたりとの  
話し 其れ故 遍澄子 綾瀬先生を  
頼み書て貰ひしとの事に候へど是とて  
余り良しとも思はれず されば何れにても無き  
方が中々にましならむかと存じ參らせ候

此方弟子共も先づ此秋は上州行は  
やめに致し參らせ候 もし來春參り  
候はば 其節は御尋ね申上へく  
候まま 宜しく御礼申上げ  
暮れとの御事におはしまし候

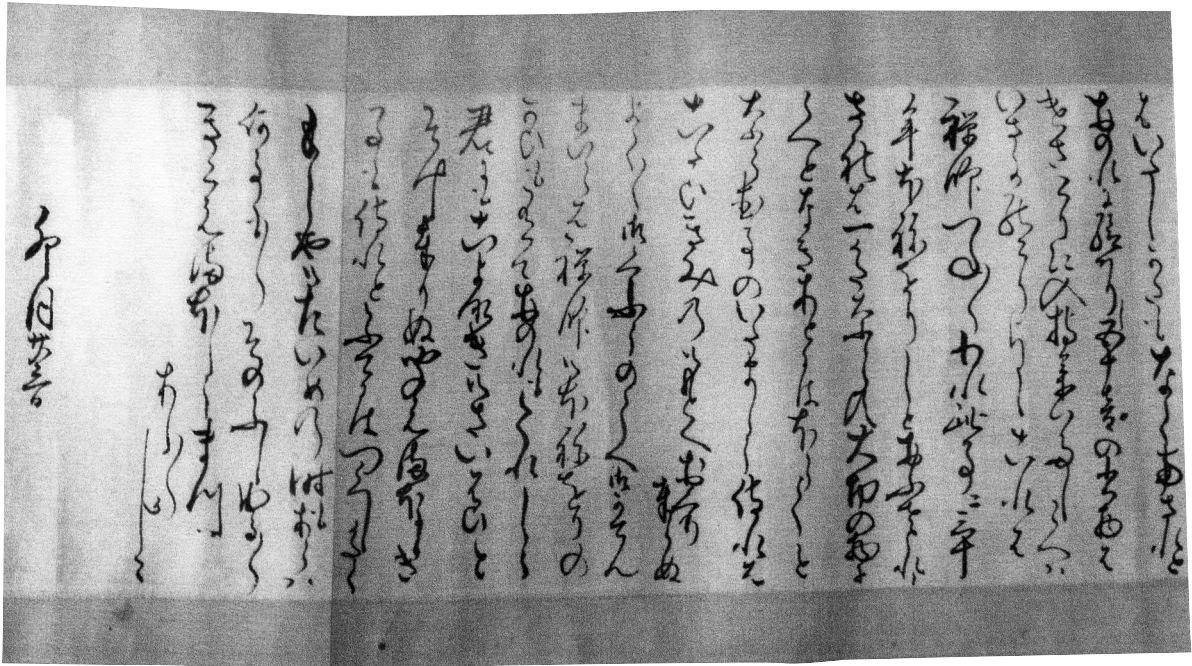
返すく日に添へ暑さに向かひ  
候へば 御障り無き様よくく  
御いとひ遊ばさるべく候

誠に久しう折絶えて  
御有様も承はり侍らず 如何  
おはしますらむと 絶えず  
思ひ出聞よるものから雲井  
の雁のいと通けき方にも



世させ給ふよし承はり侍禮者  
 音信聞えむ事もお毛ひたえて  
 う知過侍るに南此程ハ江戸  
 ち可く此地への便りもよろしき  
 所へ移轉せき世給ひぬるとし  
 いと嬉しうまの安たり乃  
 御たいめハ可刀くともせめては  
 まれ尔玉章の由きゝもあらば  
 以可者りうれし可ら無登  
 ま川古の文をつて被參候  
 いよゝ御春こや可にわ刀ら世  
 たまひ何よ利可御めて刀う  
 与そ那可ら本き奉りぬおのれ  
 事も閑者り奈ういまにな  
 可らひ  
 をり被參候されと過つるとしの  
 ま可つ火尔本尊者しめ奉り  
 ちりも能こら須や遣うせ良  
 寛禪師の御書物など ます事ニ  
 をしき事に候へと 折あしう  
 他行い刀せしあとの事なれ  
 者い刀し可刀もなく南されと  
 おのれ尔給はりし五十音の書物者

せさせ給ふよし承はり侍れば  
 音信聞えむ事も思ひ絶えて  
 打過侍るになむ 此程は江戸  
 近く此地への便りも宜しき  
 所へ移轉せき世給ひぬるよし  
 いと嬉しう目のあたりの  
 御対面は難くともせめては  
 稀に玉章の往き来もあらば  
 如何ばかり嬉しからむと  
 先づこの文を伝て參らせ候  
 弥ゝ御健やかに渡らせ  
 給ひ何よりか御目出たう  
 よそながら祝ぎ奉りぬ 己れ  
 事も変はり無う今に承らひ  
 居り參らせ候 されど過つる年の  
 災火に本尊初め奉り  
 塵も残らず焼け失せ良  
 寛禪師の御書物など誠に  
 惜しき事に候へと 折悪しう  
 他行致せし後の事なれ  
 ば致し方も無くなむ されど  
 己に給はりし五十音の書物は



遣さこりに入持参い多し候へハ  
 いさゝ可能こり被参候 古禮者  
 禪師つ年くわれ此事二十  
 年本禰をりしとおふ世られ候  
 さ禮者一可刀奈良須大切の物ル  
 候へとなきあと爾は本う久と  
 奈良む事のい刀ましく侍れ者  
 古刀比きみ乃御もとへおく利

奉りぬ

よくく御久ふうのうへ御可てん  
 まいら者禪師御本禰をりの  
 可ひも有ておのれもうれしう  
 君尔毛古与那き御さい者ひと  
 そんし奉りぬ 聞え滿本しき  
 事も侍れと ふて尔はつ久し可力く  
 もしや御たいめ乃時もあらハ  
 何事もくそのふし由るく  
 きこえ滿本しうま川ハ

あらく

かしこ

卯月廿三日

袈裟行李に入持参致し候へば  
 聊か残り参らせ候 これは  
 禪師常く我れ此事に三十  
 年骨折りと仰せられ候  
 されば 一方ならず大切の物に  
 候へど 亡き後には反故と  
 ならむ事の痛ましく侍れば  
 此度君の御元へ送り

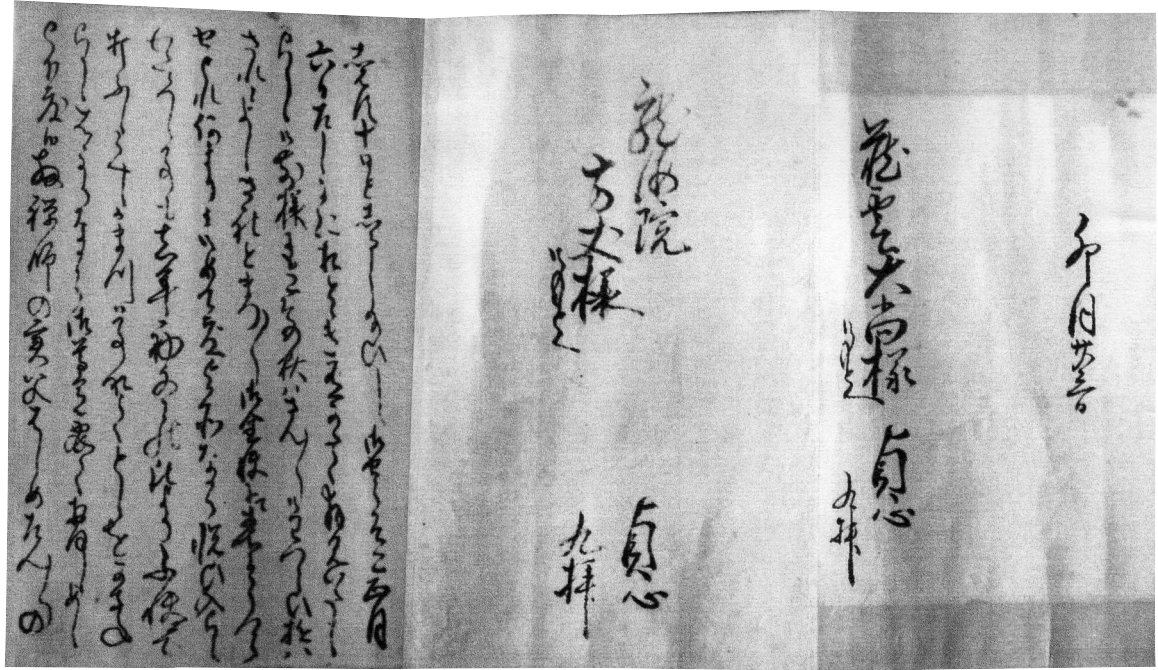
奉りぬ

よくく御工夫の上御合点  
 参らば 禪師御骨折の  
 甲斐も有て己も嬉しう  
 君にもこよなき御幸ひと  
 存じ奉りぬ 聞えまほしき  
 事も侍れど筆には尽し難く  
 若しや御対面の時もあらば  
 何事もくその節ゆるく  
 聞こえまほしう 先づは

あらく

かしこ

卯月廿三日



藏雲大尚様

御もとへ

貞心

九拜

(5)  
龍海院

方丈様

御もとへ

貞心

九拜

3

(6)  
志者須十日と志るし給ひし御せうそこ正月  
六日たし可に相と、き有可刀く拜見し

被參候 御前様もこそその秋へさんく御王つらひ遊ハ

され候よしさ禮とまつく御全快尔て春尔うつら

せられ何より可御めて度与所な可ら悦ひ入被參候

わ刀久し事も去年初冬能比より不快にて

打ふしこんし候ま川ハ事那久としを可き年

被參候者、可りな可ら御尊意安くおほしめし

被下度候扱禪師の実父者しめたんくの

藏雲大尚様

御もとへ

貞心

九拜

龍海院

方丈様

御もとへ

貞心

九拜

師走十日と記し給ひし御消息 正月

六日確かに相届き有難く拜見致し

参らせ候 御前様にも去年の秋は散く御患ひ遊ば

され候よし されど先づく御全快にて春に移ら

せられ何よりかお目出度 他所ながら悦び入参らせ候

私事も去年初冬の比より不快にて

打臥し困じ候 先づは事無く年を重ね

参らせ候憚りながら御尊意安く寛し召し

下され度候 扱禪師の実父初め段くの



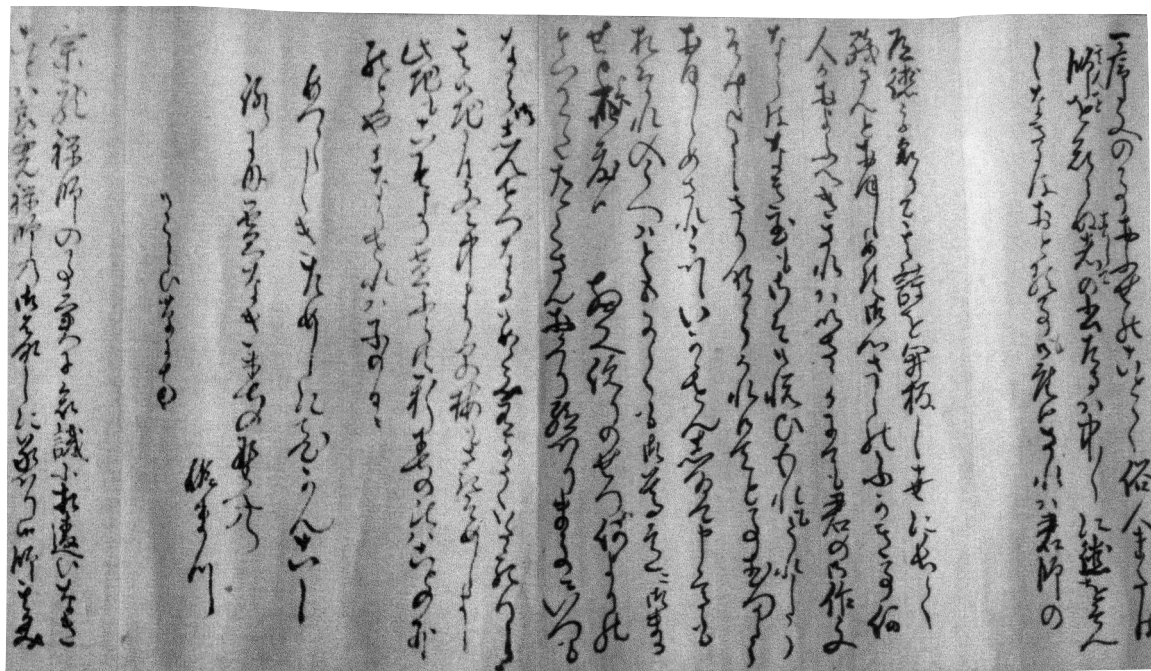
御たつ年早速御返し申上度そんし被參候へと  
武可し能事をよく志り刀る老人共ハ皆死刀え  
わ可きもの、申所お保つ可那く候満、いろく手を  
まうしやうくあらまし志れ申候ま、申上介候  
佐そ可し返し御待可年遊ハさるへ久日々氣を  
もみをり候へとおもふやうニ良知あ可須真事ニ  
古まり入り被參候師の肖像もこそその冬薬師  
堂の庵主の方ニよき便り有と申され候満、

たのみつ可ハし候所今刀御もとへと、可さるやう  
御申古され候満、おとろき薬師堂へ参り  
たつ年候所あまりよき便りもなく候満、我もと尔  
志まひおきたるとの事 真事ニあきれ被參候  
されハ此度ハま王り道なれど江戸さんとにあつ  
良ひつ可ハし申候 詩集一さつ 序文ニ二通り是ハ  
嵐崎遍澄と申法師□□年比禪師と  
志刀し久い刀世し人尔て此度開板の事ニ付  
わさく私方へ事持参い刀され候満、さし上  
御め尔可遣被參候詩ハお那し事ニ候へと所く  
文し能あやまり有をある学者のあら刀め  
な保したるとの事ニ候 序文も俗人のさ久尔てさの  
みと類へき所もなきやう尔候へと御なくさみのため  
御覽に入被參候 便りの世つ御可へし被下度候  
(7)  
一序文の事あふせ能古と久俗人ましては

御尋ね早速御返し申上げ度く存じ参らせ候へと  
昔の事を良く知りつる老人共は皆死絶え  
若き者の申所寛束無く候まま色々手を  
申し漸々あらまし知れ申候まま申上げ候  
さぞかし返し御待ち兼ね遊ばさるべく日々氣を  
もみ居り候へど思ふ様に埒明かず誠に  
困り入り参らせ候 師の肖像も去年の冬薬師  
堂の庵主の方に好き便り有と申され候まま

頼み遣はし候所今だ御元へ届かざる様  
御申越され候まま驚き薬師堂へ参り  
尋ね候所余り好き便りもなく候まま我元  
しまひ置きたるとの事 誠にあきれ参らせ候  
されば此度は回り道なれど江戸三度に詠  
ひ遣はし申候 詩集一冊序文ニ通り是ハ  
嵐崎遍澄と申法師□□年頃禪師と  
親しく致せし人にて此度開板の事に付  
わさく私方へ持参致され候まま差し上  
御目につけ参らせ候 詩は同じ事に候へと所々  
文字の誤り有を或る学者の改め  
直したるとの事に候 序文も俗人の作にてさの  
み取るべき所も無き様に候へと 御慰みの為  
御覽に入参らせ候 便りの節 御返し下され度候  
一序文の事仰せの如く俗人ましては





其人を  
師を知らぬ者の書たるハ中く徳をそん  
しなきはとおと類事も御座候されハ君師の

道徳乎知りて其詩を開板し吉に長久

残さんとお保しめ須御心さしのふ可き事何

人のおよふへきされハ以さ可尔ても君の御作文

ならばなき主も佐そ御悦ひわれもうれしう

そんし被參候さり那可ら可れ是と事武つ可しう

お保しめされ候ハ、い可、世ん志ゐて申候亭も

於それ入候へハとも可久も御尊意ニ御ま可

せ申<sup>上</sup>度候 扱、便りのせつハ何より能

真王刀たくさんお久り給ハリ、ま事ニいつも

な可ら御志ん世つなる御めくみ有可刀くい刀、起被參候

其御地ルは冬中より早梅もさ起そめしよし

此地も古そより雪ふら須 新春の比ハ古との外

能とや可なり遣れハルの日ニ

めつらしたためしに飛可ん古し

路尔母雪なき春の野へ乃

姫ま川

御王らひ草に南

御笑ひ草になむ

宗龍禪師の事

実<sup>(80)</sup>に知識<sup>(80)</sup>に相違ひなき

古とハ良寛禪師乃御者那しに承ハリ候師其可み

其人を  
師を知らぬ者の書たるは中々に徳を損  
じ無きには劣る事も御座候 されば君師の

道徳を知りて其詩を開板し世に長く

残さんと覚し召す志の深き事何

人の及ぶべき されば聊かにても君の御作文

ならば亡き魂もさぞ御悦び我も嬉しう

存じ參らせ候 さりながら彼是と事難しう

覚し召され候はば如何せん 強ゐて申候ても

恐れ入候へば ともかくも御尊意に御任

せ申<sup>上</sup>度候 扱々便りの節は何よりの

真綿沢山送り給はり誠にいつも

ながら御親切なる御恵み有難く戴き參らせ候

其御知には冬中より早梅も咲き初めしよし

此地も去年より雪降らず 新春の頃は殊の外

のどやかなりければその日に

めつらしたためしにひかん越

路にも雪なき春の野辺の

姫松

御笑ひ草になむ

宗龍禪師の事

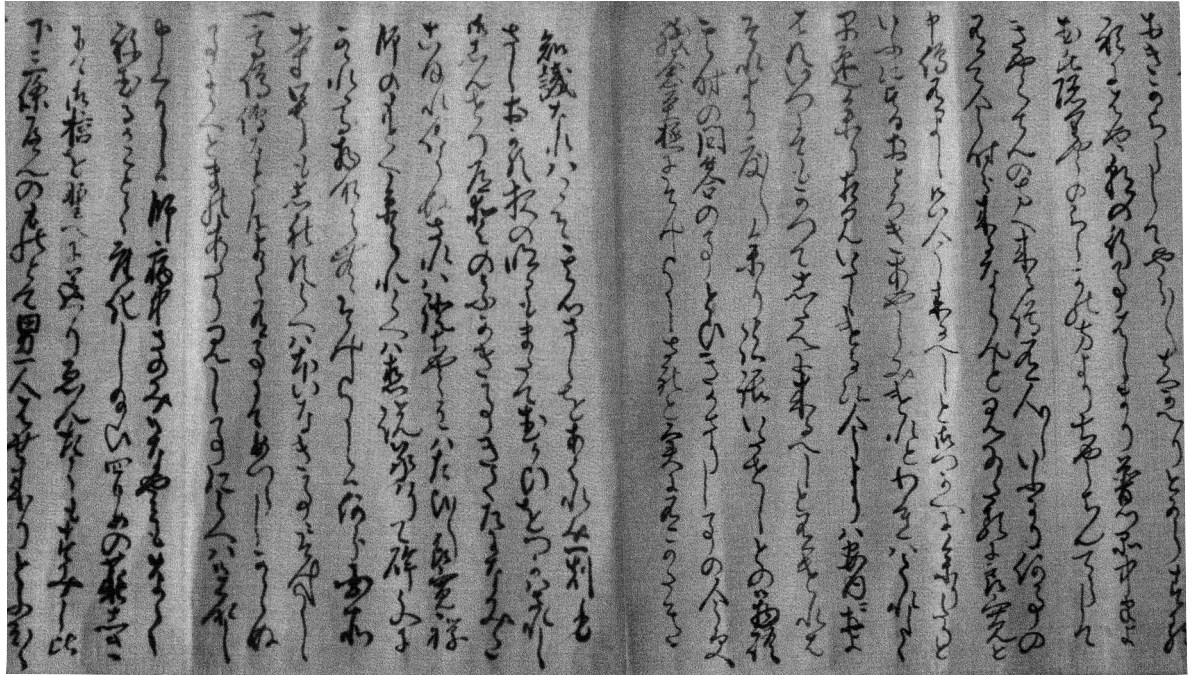
実<sup>(80)</sup>に知識<sup>(80)</sup>に相違無き

事は良寛禪師の御話しに承はり候 師其可み



行脚の時分宗龍禪師の道徳高く聞え遣れハ  
とふそ一度相見い刀し度思ひ其寺に一夏久王刀  
い刀しをり候へと禪師今ハ隱居志給ひて別所  
るましてやうい尔尔見え給ハ須み刀り尔行事  
可那者禪者其侍<sup>侍</sup>付てとりつきを刀のみ給ひと  
者可くくし久とりつきくれ春い刀つら尔日越過し  
可久てハせつ可久來りし可ひも那し志ゆ世ん  
人傳尔ては良知<sup>良知</sup>可須直爾禪可參ら世むと  
其おもむきを書志刀、めある夜志ん更ニ志のひ出  
隱里やうのうら能方へま王り見るに高塀尔天  
古由遍くも見え須こハい可、世むと見めぐり給ふ尔  
庭の松可え遍ひの古那刀へさし出刀類有是  
さい王ひとそれとり付やうくと塀を古え  
庭の内尔入たれと兩戸可刀くとさしている事  
なら春是また來りてむ那し久可へらむさん  
禪なりい可、世んと志ハし立や春らい古、  
閑しこ見わ刀し給ふ尔あま戸のそとに手水  
者ちの有遣れハ是こそよき所なれ夜明は可那ら春  
手水志給ハん其時御めニあ刀類やう尔と手水  
者知のふ刀能うへ尔文書物をの世おき塀の毛登  
まで行給ひし可ふと心付毛し風の吹なハ立う世ん  
毛志れ須と又立もとり石を飛ろひて其うへニのせ  
おき可らうしてやうく立可へりと可う春類  
程尔者や朝の行事者しまり 普門品中半よ

行脚の時分宗龍禪師の道徳高く聞えければ  
どふそ一度相見致し度思ひ其寺に一夏掛塔  
致し居り候へど禪師今は隱居し給ひて別所  
居まして容易に人に見え給はず濫に行事  
叶はねば其侍僧に付て取り継ぎを頼み給ひど  
量くしく取り継ぎくれ徒に日を過し  
かくては折角來りし甲斐も無し 所詮  
人伝にては埒明かず直に願ひ參らせむと  
其趣を書認め或る夜深更に忍び出  
隱寮の裏の方へ回り見るに高塀にて  
超ゆべくも見えず 此は如何せむと見めぐり給ふに  
庭の松が枝 塀のこなたへさし出たる有是  
幸ひとそれに取り付漸くと塀を越え  
庭の内に入たれど兩戸堅く鎖して入る事  
ならず 是まで來りて空しく返らむも残  
念なり如何せんと暫し立休らひ此こ  
彼しこ見渡し給ふに兩戸の外に手水  
鉢の有ければ是こそ好き所なれ 夜明けは必ず  
手水し給はん其時御目に当る様にと手水  
鉢の蓋の上に文書物を載せ置き塀の本  
まで行給ひしがふと心付 若し風の吹なば立失せん  
も知れずと又立戻り石を拾ひて其上に載せ  
置き 辛うじて漸く立返りとかうする  
程に早や朝の行事始まり 普門品中半誦

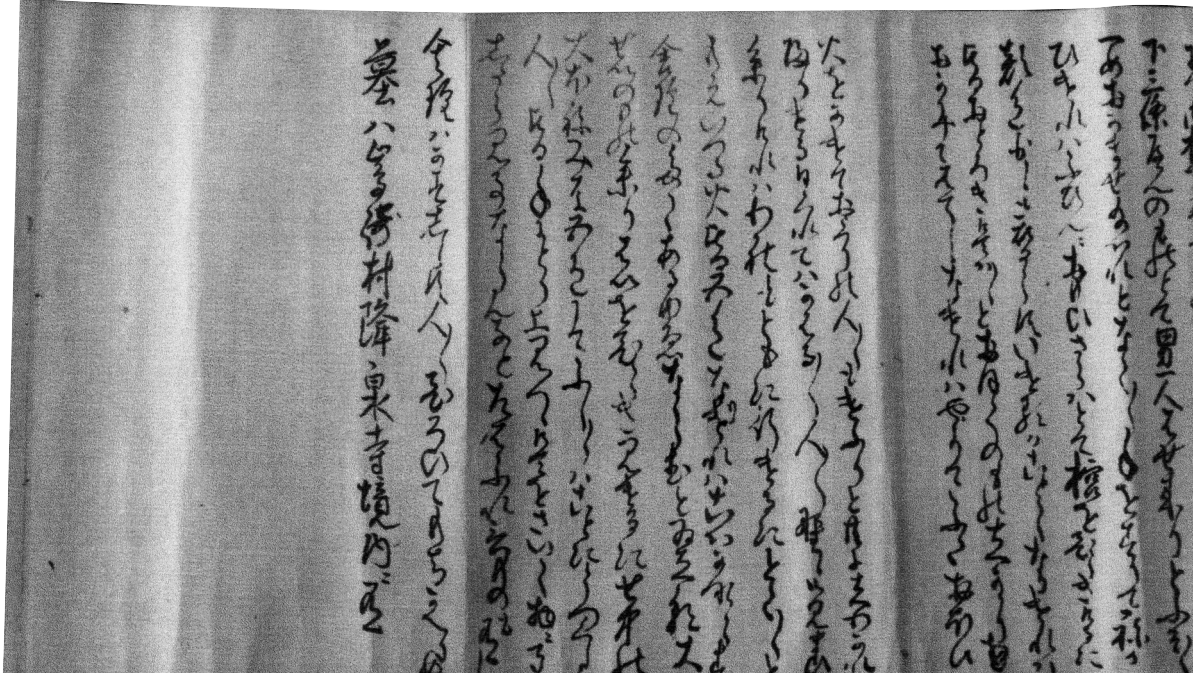


む比隱里やうのらう可能方より知やうちんてらして  
きやくてんの方へ来る僧有人くいふ可り何事の  
有て今時分来るならんと見る刀類良寛と  
申僧有よし只今来るべしと御使へに参りたりと  
いふに皆おとろきあやしみ遣れとわ連ハうれしく  
早速参り相見刀し遣る仁今よりハ案内二およ  
者須いつても可つて志刀へ尔来るへしと有遣れ者  
それより度々参り法話し刀世しとの御物語  
其時の問答の事とひき可さりし事の今更  
残念至極尔そんし被参候 さ礼と実尔有可刀幾

知識なればこそ其心さしをあ王れみ一刻も  
さしお可須夜の明るもま刀で武可ひをつ可ハされし  
御志ん世つ道愛のふ可き事きくた尔なみ刀  
古保れ侍りぬされハ證ちやう主ハたひく良寛禪  
師の毛とへ参られ候へハ直説承ハりて碑文尔  
可くれ刀る物那ら無とそんし被参候何分國所  
寺号も志礼須候へハ本いなき事ニそんし被参候  
(9)  
一高僧傳などとはよく有事にて珍らしからぬ  
事尔候へとま能あ刀り見し事にへハ御者那し  
申上被参候師病中さのみ御なや三もな久  
禪武る可こと久座化し給ひ四日目の葬志き  
尔て御棺を野へ尔送りゑんたうも春みし比  
下三條遍んのも能とて男一人者世來りとふそく

む比隱寮の廊下の方より提灯照らして  
客殿の方へ来る僧有 人々訝り何事の  
有て今時分来るならんと見居たるに良寛と  
申僧有よし只今来るべしと御使へに参りたりと  
言ふに皆驚き怪しみけれど 我れは嬉しく  
早速参り相見致しけるに 今よりは案内に及  
ばず 何時にても勝手次第に来るべしと有ければ  
それより度々参り法話し刀世しとの御物語  
其時の問答の事 問ひ聞かざりし事の今更  
残念至極に存じ参らせ候 されど実に有難き

知識なればこそ其志を憐み一刻も  
さし置かず夜の明るも待たで迎ひを遣はされし  
御親切 道愛の深き事 聞くだに 涙  
こぼれ侍りぬ されば證聽主は度々良寛禪  
師の許へ参られ候へば直接承はりて碑文に  
書かれたる物ならむと存じ参らせ候 何分國所  
寺号も知れず候へば本意無き事に存じ参らせ候  
一高僧傳などにはよく有事にて珍らしからぬ  
事に候へと目のあたり見し事に候へば御話し  
申上げ参らせ候 師病中さのみ御悩みも無く  
眠るが如く座化し給ひ四日目の葬式  
にて御棺を野辺に送り 引導も済みし頃  
下三條辺の者として男一人 馳せ来りどうぞく

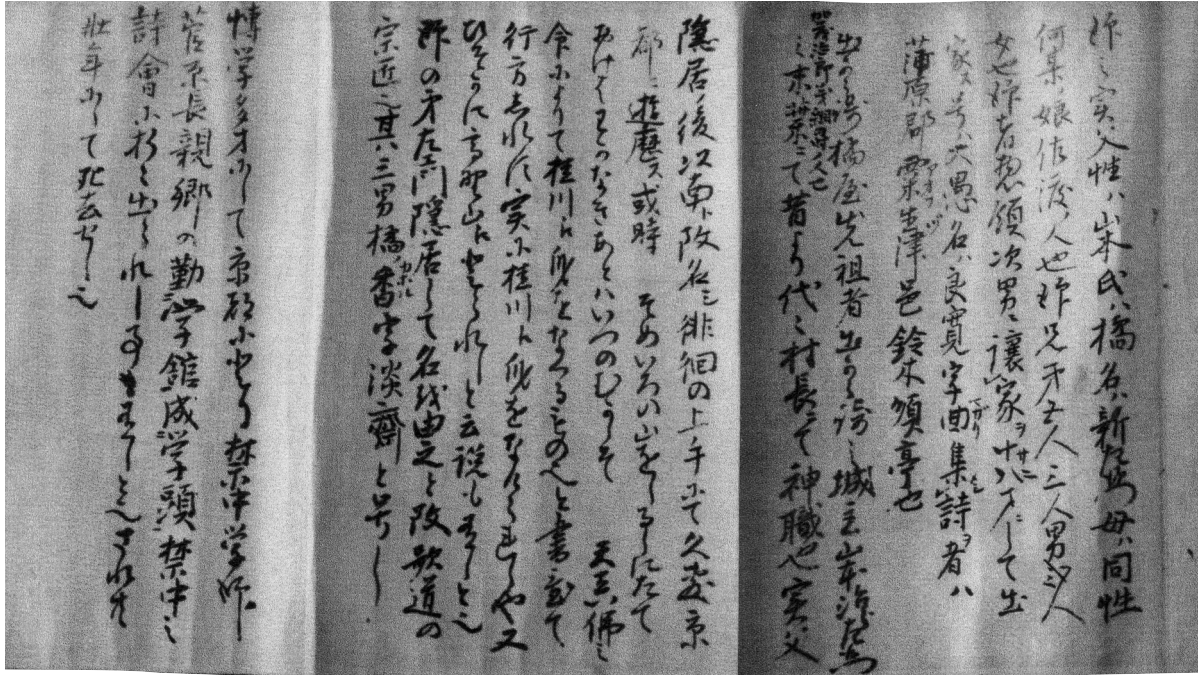


一めお可ませ給はれとな久く手を春りて禰可  
 ひ遣れハふひんニお毛ひさらハとて棺を飛らき介るに  
 顔色等も變ら須い遣類可古とくなり遣れハ  
 皆おとろきはハくとお保久の也能立可り惣  
 お可みて者てしな遣れハや可てふ刀お本ひ

火を可遣てお久り能人くも遣ふりと共尔立わ可れ  
 歸り遣る日久れてハ可者るく人く野尔御見まひニ  
 參り介れハわ礼もとも仁行遣る仁と久くと  
 毛えいつる火皆五色な遣れハ古ハ可那ら春  
 舍利の多久ある由多なら武とみ立朝大  
 世以の毛能參り者ひを飛らき見遣る仁世中能  
 大本禰みな五色尔てふしくハ古と仁うつ久しう  
 人く皆手尔とり上見つ、是をさい久物ニても  
 志刀う見事ならんなどた者ふれ出ものも有し  
 舍利ハ可春志ら須人く飛ろひて毛知可へりぬ  
 墓ハ鳶崎村隆泉寺境内ニ有

一目拝ませ給はれと泣くく手を擦りて願  
 ひければ不憫に思ひさらばとて棺を開きけるに  
 顔色等も変らず生けるが如くなりければ  
 皆驚きはくくと多くの者立かかり惣  
 拝みて果てしなければ聽て蓋覆ひ

火をかけて送りの人々も煙と共に立別れ  
 歸りける 日暮れては替るく人々野に見舞ひに  
 參りければ我れも共に行けるにとくくと  
 燃え出る火皆五色なりければこは必らず  
 舍利の多くある故ならむと居立朝大  
 勢の者參り 灰を開き見遣るに背中の  
 大骨皆五色にて節くは殊に美しう  
 人々皆手に取りあげ見つ 是を細工物にでも  
 為たう見事ならんなど戯れ出者も有し  
 舍利は数知らず人々拾ひて持ち帰りぬ  
 墓ハ鳶崎村隆泉寺境内ニ有



師の実父性ハ山本氏ハ橋名新左衛門母ハ同性  
何某娘佐渡人也師兄弟五人三人男式人  
女也師者惣領次男ニ讓家ヲハスルして出  
家ス号ハ大愚名ハ良寛字回集詩者ハ  
蒲原郡粟生津邑鈴木順亭也

隱居後以南改名ニ徘徊の上手久敷京  
都ニ遊歴ス或時 そめいろの山をしるしにたて  
おけばわがなきあといつのみかしぞ 天真佛  
命によりて桂川へ身を投ぐるものなり と書置きて  
行方知れず 実に桂川へ身を投げ入れしや 又  
密かに高野山へ登られしと云説も有しとなり  
師の弟左エ門 隱居して名を由之と改 歌道の  
宗匠なり 其三男橋ノ香 字淡齋と号し

博学多才にして京都に登り禁中  
菅原長親郷の勤学館成学頭禁中  
詩會小折と出られし事も有之とされ共  
壯年にして死去せしなり

(10) 師の実父性ハ山本氏ハ橋名ハ新左衛門母ハ同性  
何某ノ娘佐渡ノ人也 師兄弟五人 三人男式人  
女也 師者惣領 次男ニ讓家ヲ十八才ニして出  
家ス号ハ大愚名ハ良寛 字回集 詩者ハ  
蒲原郡粟生津邑鈴木順亭也

(11) 出雲崎橋屋先祖者出雲崎之城主山本治郎左衛門  
加茂治郎茂綱の時ノ人也

之末葉にて昔より代々村長にて神職也実父  
隱居ノ後以南ト改名シ徘徊の上手久敷京  
都ニ遊歴ス或時 そめいろの山をしるしにたて  
おけばわがなきあといつのみかしぞ 天真佛之  
命尔よりて桂川江身をなぐる毛の也と書置て  
行方志れ須実尔桂川江身をな介う連しや又  
ひそかに高野山江登られしと云説も有しと也  
師の弟左エ門 隱居して名越由之と改歌道の  
宗匠也其三男橋ノ香 字淡齋と号し

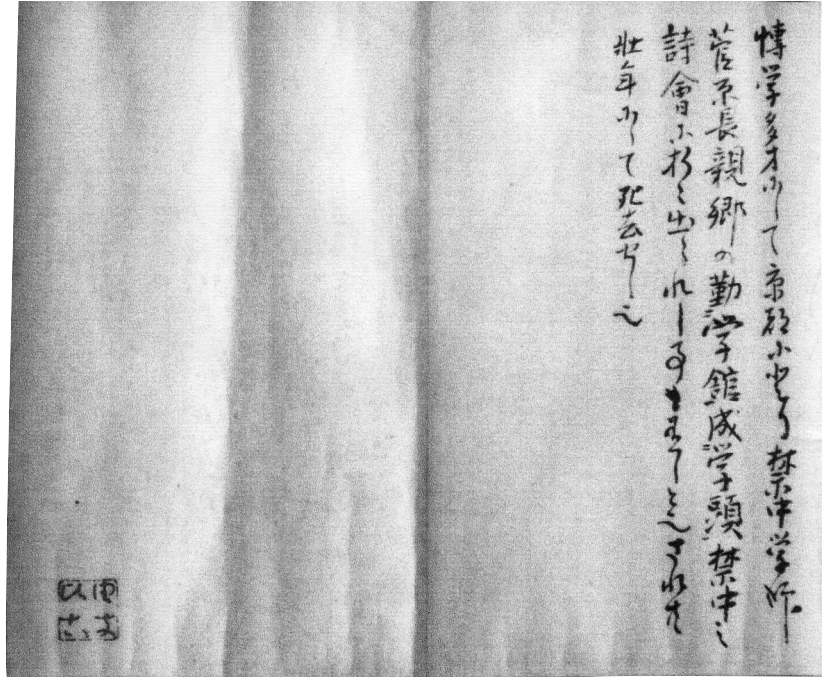
博学多才にして京都に登り禁中  
菅原長親郷の勤学館成学頭禁中之  
詩會小折と出られし事も有之とされ共  
壯年にして死去せしなり

師の実父 姓は山本氏は橋名は新左衛門 母は同姓  
何某の娘 佐渡の人なり 師兄弟五人 三人男 式人  
女なり 師は惣領 次男に家を譲り 十八才にして出  
家す 号は大愚 名は良寛 字回集 詩を集めし者は  
蒲原郡粟生津邑 鈴木順亭なり

出雲崎橋屋 先祖は出雲崎の城主山本治郎左衛門  
加茂治郎茂綱の時の人なり

の末葉にて昔より代々村長にて神職なり 実父  
隱居の後 以南と改名し 俳諧の上手にて久しく京  
都に遊歴す 或る時 そめいろの山をしるしにたて  
おけばわがなきあといつのみかしぞ 天真佛の  
命によりて桂川へ身を投ぐるものなり と書置きて  
行方知れず 実に桂川へ身を投げ入れしや 又  
密かに高野山へ登られしと云説も有しとなり  
師の弟左エ門 隱居して名を由之と改 歌道の  
宗匠なり 其三男橋ノ香 字淡齋と号し

博学多才にして京都に登り禁中  
菅原長親郷の学館に勤め 学頭と成り禁中の  
詩會に折々出られし事も之れ有となり され共  
壯年にして死去せしなり



由支  
比古

由支  
比古

貞心尼略年譜と貞心尼自筆書簡

左に貞心尼略年譜を付す。さらに、貞心尼自筆書簡は現在六通が伝えられていてとされているが、それらについて、卷子に貼り並べられた書簡を基準に順次通し番号を付けて、それらを先学西郡久吾氏、相馬御風氏、堀桃坡氏が採録した書簡と比較できるように一覧表にし、下に掲げる。

貞心尼略年譜

寛政 十年 (二七九八)	1	長岡にて誕生(長岡藩士奥村五兵衛の娘ます)
文化十一年 (二八一四)	17	北魚沼郡小出島の医師関長温に嫁ぐ
文政 三年 (二八二〇)	23	夫と離別し実家へ戻りのち 閻王寺の心龍、眠龍姉妹尼の徒となる
文政 九年 (二八二六)	29	島崎木村家の小舎に良寛を訪ぬ
文政 十年 (二八二七)	30	長岡福島閻魔堂へ移る
天保 元年 (二八三〇)	33	病臥の良寛禪師を看護する
天保 二年 (二八三一)	34	良寛禪師の遷化(正月六日)に遭い葬儀に加わる
天保十二年 (二八四二)	44	柏崎洞雲寺廿五世定廣泰禪和尚につき正式に 得度、血脈相続
嘉永 四年 (二八五二)	54	釈迦堂焼失(四月廿一日)、その二日後藏雲和尚へ手紙を認む
安政 六年 (二八五九)	63	智譲尼弟子となる
文久 元年 (二八六一)	64	藏雲和尚への手紙を認む(やよひ廿七日)
元治 二年 (二八六五)	68	藏雲和尚への手紙を認む(しはす十日と…正月六日…)
慶應 三年 (二八六七)	70	藏雲和尚、江戸芝尚古堂より『良寛道人遺稿』 を上梓
明治 二年 (二八六九)	72	藏雲和尚、世壽五十七で示寂(六月十二日)
明治 五年 (二八七二)	75	柏崎廣小路の不求庵にて世壽七十五で逝去 (二月十一日)

先学採録貞心尼自筆書簡一覧表

貞心尼略年譜	貞心尼自筆書簡	採録者	採録書名	採録箇所
1 (1)	先年禪師…	堀桃坡	録文 『良寛と貞心尼の遺稿』	その四 A p. 282
2 (2)	此方弟子共…	西郡久吾	録文 『北越沙門良寛全傳』	二 A p. 194
3 (3)	可へ春く日尔…	相馬御風	録文 『良寛と貞心尼全集』	その一 B p. 133
4 (4)	萬事ニ久しう…	相馬御風	録文 『良寛と貞心尼全集』	その一 B p. 133
5 (5)	龍海院 貞心 方丈様 九拜 御もとへ	相馬御風	録文 『良寛と貞心尼全集』	その一 B p. 133
6 (6)	志者須十日と…	堀桃坡	録文 『良寛と貞心尼の遺稿』	その三 A p. 278
7 (7)	一序文の事…	堀桃坡	録文 『良寛と貞心尼の遺稿』	その三 B p. 279
8 (8)	宗龍禪師の事…	堀桃坡	録文 『良寛と貞心尼の遺稿』	その四 B p. 282
9 (9)	一高僧傳など…	堀桃坡	録文 『良寛と貞心尼の遺稿』	その四 B p. 282
10 (10)	師之実父…	堀桃坡	録文 『良寛と貞心尼の遺稿』	その四 B p. 282
11 (11)	出雲崎橋屋…	堀桃坡	録文 『良寛と貞心尼の遺稿』	その四 B p. 282

これらを見ると、例えば、書簡の upper 宛名、自署がどこに採録されているか、その変化が確認される。書簡本紙の配列も紙継で区切られるものと否とのものもあり、正確には何通とすべきなのか、原書簡が所在不明などで直接閲覧不能なため、分明にされないところが残されている。

こうした貞心尼の自筆書簡の中には、貞心尼の日常を垣間見させる記述も存在している。貞心尼は越後長岡生まれで、隣地魚沼小千谷の漢方医のもとへ嫁ぎ、夫と離別後実家に戻り、その後に出家への道を踏み、以来長岡、柏崎辺に住庵していたが、時には上州、江戸表へも足を運ぶことがあったようであり、この越後を出たことを綴る文が見えるのである。そしてまた、越後人貞心尼の書き綴る文字の中には、例えば、「志ゆせん」(所詮)、「ゑんたう」(引導)、「迎ひ」(迎へ)、しみて(強ひて)、給ひど(給へど)、候へしが(候ひしが)、あつらひ(誂へ)などと方言を話す貞心尼を偲ばすものが見られる。

貞心尼の自筆書簡によれば、こうした貞心尼の日常の姿の一端が知られるばかりか、書簡の宛主の藏雲和尚の動静の一部も明かされるところがある。例えば、文久元年(一八六一)やよひ廿七日付と考証される書簡(堀氏採録 その二)の末尾に添え書きされた部分に、「水晶山の水晶水にて水晶身を浴し給ひしのちはすこやかにならせ給ひぬるよし承はり…」とあるのは、温泉での湯治滞留を示すところと見られ、これに符合する藏雲和尚自筆の書簡が、相馬御風氏によってその著『良寛百考』に採録されている。すなわち、「龍海雲浮生」との自署で牧江忠右衛門に宛てられた「臘月廿一日」付がこれで、そこには「小野揖別後 信州山田温泉に附り却罹病痾、旬餘空滞杖漸八月下旬歸院仕候」との文が綴られていて、体軀を病んだ藏雲和尚の消息が伝えられている。この文は、藏雲和尚の早逝の原因を推測させもすることである。

さて、ここで、卷子に収められなかった貞心尼筆の藏雲和尚宛書簡を、参考のために先学堀桃坡氏の著書『良寛と貞心尼の遺稿』から引録しておくこととしたい。

藏雲和尚への手紙 その二(堀 276頁) (三条市一ノ木戸町伊藤氏藏貞心尼筆のもの 巻物)

此程は御せうそこ給はり事に久くにていとめづらしう御たいめのこゝちしてくりかへしまゐらせ候まづはあなたさまにも御機げんよく入らせられ候

より御めで度ほぎ奉り候わたくし事もかはりなう暮しをり候まゝはゞかりながらみ心安う

おぼしめし被下度候先つとし参らせし書物も相違なくとゞき候よし安心いたしまゐらせ候御へんじ

承はらぬ内はおぼつかなく案じるまゐらせ候扱去年中は殿様御かくれ遊ばされ候かと御事しげく御

出杖もできかね候よし御もつとももの御事にぞんじまゐらせ候ことしも又御こし遊ばされ度やうにおふせられ候へど

今今はやまつともいはし君こんといふも久しき物とおもへば

一良寛禪師の詩集上木遊ばされ度とのおぼしめしわたくしもかねぐ其事心にかけどふぞいさゝかにても板にゑり長く世にのこさましくおもひまゐらせ候へど何分自分におよばぬ事なればむなし

く打過まゐらせ候此地かん原へんの者共くは立て多く詩文などあつめしとの事に候へど今だ出来立

不申候やとかくか様の事は成がたき物にて先年も石碑立むとわたくしも江戸まで参り文も出き

石もとりよせ候へしかど俗人のとりもちゆゑいろゝもの事を申長びく内にせわ人死去いたし其後と

り立てせわする者もなく今は石もかく成しとの事に候されや君の御志願おそくももし成就いたし候はゞいかばかりうれしからむとぞんじまゐらせ候

一ま事やおふせのごとくちか比は僧俗共に道を守らず見るもきくもかたはらいたき事のみにて

行人のたえてなければやへむぐらしげりて道もわかれざりけり



なげかはしきことに南君にもかねて御隠居あそばされ度とのおぼしめし御もつともには候へどさ  
のみいそがせ給ふにもおよぶまじくや御身だにまめにならせ給はゞ何も娑婆やくとおぼしめし  
しばらく御住職のかたよろしからむかともかくも世のなかのあるにまかせ縁にしがひ時を過すよ  
りほかなくぞんじまゐらせ候ここえまほしき事はつきせず候へど又々後の便りとまづはあらゝか  
しこ

やよひ廿七日

龍海院方丈様

御もとへ

貞心九拜

水晶山の水晶水にて水晶身を浴し給ひしのちはすこやかにならせ給ひぬるよし承はりよそな  
がら悦びまゐらせ候こたびも又何よりのしな給はり有がたくいたゞまゐらせ  
りかへしかへすゞもおだまきのいとまうれしき君がまごころ

### 藏雲和尚への手紙

その五 (堀 285頁) (長岡市本町杵淵氏所持貞心尼筆の手紙)

かへすゞ御便りのせつ御やすう御きかせ給はり度御ねがい申上まゐらせ候はゝかりながら

御つれ遊ばされ候三人の方々へも御つひでのせつよろしう御ねがひ申上まゐらせ候

先立ては久々にて御たいめん申上ま事にうれしく悦び入るまゐらせ候されど何かと御事しげくしてしみ  
ゞ御物語りも聞えかはさず御わかれ申上候へばいとゞ御残り多くぞんじまゐらせ候御道中つゝ  
がなく御かへり遊ばされ候後も何の御障りもなうおはしまし候やいかゞと御案じ申上まゐらせ候わ

たきし事はかはりなうくらしをり候まゝはゞかりながら御心安くおぼしめし給はり度候きみ此地に

おはしまし候程はてんきもよろしく真事に時せつに御座候へしがかへらせ給ひて後ばてんきあ

しく土用中もふりくらし候へば米ねだんにはかに高くなり人の心もおだやかならず下々のものはたゞ

くどきばなしのみいたしをり真事になげかはしき事にぞんじまゐらせ候されど此ほどはてんきも少

しはよろしくなり候へば此分にて照つゞき候はゞかくべつの事もあるまじとの事に御座候日にそへ

あつさもまさり行候へばずい分ゞよく御いとひ遊ばさるべく候先は御やうす承はり度あらゝか

しこ

水無月廿日

龍海院方丈様

御もとへ

貞心九拜

### 藏雲和尚への手紙

その六 (堀 286頁) (直江津市山本医院 貞心尼筆の手紙)

かへすゞ御詩いろゞ見せ給はり有がたくしらすながら何れも御作意おもいろく承はりまゐらせ候

春もいつしか中半過やうゞ此程は少しはのどやかになりまゐらせ候あなた様に  
もいよいよ御機げ

んよく入らせられ候はんと御めで度ぞんじ上まゐらせ候わたくし事もかはりなうくらしをり候まゝ

はゞかりながらみ心安うおぼしめし給はり度候扱又こそ冬の冬はいとめづらしきわ  
たをんじやくを給

はり是まで見しこともきゞし事もなく候へばいたゞきもあへずまず心見にせ中へ入おき待るに南は

のゞと春日にあたるこゝちして寒さもしらすくらしまゐらせ候ま事や年々それ

ぐにみ心つかせ

られ老の寒さをすくはせ給ふ事世に有がたくよるひる悦びまゐらせ候

いつの世におくりかへさんいろくとひとかたならぬきみがをんじやく

御わらひ草に南

初春の比この地山田何がし御手紙持参し尋くれられくはしき御様子承はりよろこびまゐらせ候師の

詩集も大かたできあがり候よしまづく安堵(安堵)いたし有がたく悦びまゐらせ候此春はあなた

様にも江戸表へ御こし遊ばされ候よしされば御かへりの後御くだし給はるべくと御まち申上奉候ま

づは御礼までにあらくかしこ

二月十七日

龍海院方丈様

御もと

貞心九拜

こぞの冬四ツ谷のさんどにあつらひつかはし候手紙とゞきしやいかゞおぼつかなく南

(細井 瞳)

### 参考文献

原 坦山著『鶴巢集』佛仙社 明治17年4月20日

蘿月照巖編『總持奕堂禪師遺稿』土谷温齋 明治29年4月23日

釋 悟庵編『坦山和尚全集』光融館 明治42年10月25日

西郡久吾編述『北越 傳人沙門良寛全傳』日黒書店 大正3年1月20日

上杉艸庵著「貞心雜考」「續貞心雜考」(越後タイムス) 昭和3年1月8日〜6

月10日、昭和3年7月8日〜10月28日(中村昭三編『貞心尼考』柏崎良寛会 平成7年 所収)

相馬御風著『良寛百考』厚生閣書店 昭和10年3月20日

相馬御風著『良寛と貞心―貞心尼全集―』六藝社 昭和13年7月15日

燕 佐久太著「良寛道人遺稿と藏雲和尚について」(『跳龍』第78號 大本山三松 總持寺)

會 昭和28年2月1日)

堀 桃坡著『良寛と貞心尼の遺稿』日本文芸社 昭和37年7月1日

原田勘平著『良寛雜話』北洋印刷 昭和49年5月1日

市川忠夫著『良寛の人間像』煥乎堂 昭和52年10月30日

飯田利行著『畔上棟仙禪師遺稿』国書刊行会 昭和59年9月27日

藤井正宣著『良寛をめぐる医師たち』(良寛医談) 考古堂書店 平成10年10月10日

龍海院編『是字寺龍海院誌』龍海院 平成19年6月25日 改訂第2刷

その他

### 謝 辞

本稿作成にあたり、写真掲出、資料調査等で次の方々から温かなご理解とご支援を賜った。謹記して心から御礼を申し上げます。

燕市良寛史料館館長 西海上壽郎先生

前橋龍海院三十四世過外一雄夫人 美代様

上州良寛会会長 市川忠夫先生

同副会長 近藤日出夫先生 他

(ほそい ひとみ 日本語日本文学科卒業生)

(たくま のぶゆき 日本語日本文学科)